

高齢化の進展に伴う救急需要の増大

- 救急搬送の現状（平成28年度）
年間出場件数・搬送人員は年々増加傾向，現着時間は延伸傾向
傷病程度別は軽症割合は減少・中等症割合微増，年齢別は高齢者が54%を占める
- 高齢者の「住まい」の状況変化
医療職不在のサービス付き高齢者住宅，有料老人ホーム，グループホームが増加

救急医療現場からの問題提起により取り組みが開始

- 救急救命センターに次々と運び込まれる看取り期の高齢者施設の入所者
⇒ 本人の意思確認はどうなっているのだろうか？
- 施設へのヒアリングの結果，入所時に意向確認はされている現状
⇒ 医療との連携が十分でなく，介護職が判断することへの不安が大きい実態
- 市民は人生の最終段階の医療の選択について考える機会がない
⇒ 在宅であっても施設であっても，市民への啓発と意向確認が重要



柏市では、医師会・介護サービス事業者・消防局・行政が協働した取り組みへ
まずは現状を共有し，課題を明らかにして，医療・介護連携と体制づくりを！
「高齢者の救急搬送に係る意見交換会」を開催

取組み内容

現状認識

- **施設へヒアリングの実施**
介護職員だけでは救急要請か外来受診か、マニュアルがあっても判断できない
病院と家族の「延命治療」に対する認識に差がある。延命治療するかどうかを説明できるガイドラインがほしい
看取りの同意書があるが主治医から救急搬送の指示が出る
- **意見交換会の開催**
看取りと急変時の対応は分けて考える必要がある
介護職員にとっては急変や看取りの対応には恐怖感や精神的なストレスが大きい
介護職員は知識がない。若い職員も多く死の経験自体もほとんどない状況

課題

- 施設、主治医、医療機関、救急隊員との連携が不十分
- 施設ごとに入所者の状況、医療職の配置状況、対応力・対応方法が異なる
- 介護職員の急変時や看取り期の対応に必要な知識や経験が不足しているため不安が大きい
- 入所時には一旦意向を確認していても、状態の変化に合わせた話し合いや再確認の機会がほとんどない

医療・介護連携を中心に、現状に合わせた多面的な取組みが必要との認識の共有が図れた

4つの取組み

- ① **本人の意思を多職種で共有できるルールづくり**
⇒多職種が同じ視点で支援ができるようなガイドライン等の作成・ルール化
- ② **介護職員への研修**
(急変時・看取り期の対応力向上、不安の軽減)
⇒指針・対応マニュアルの整備、柏市共通様式の作成
- ③ **市民への啓発**
(人生の最終段階の医療の選択と意思表示)
⇒効果的な市民啓発の場や方法の検討
- ④ **医療との連携**
(主治医、施設嘱託医、MC協議会、救急隊員の共通理解ができる体制づくり)
⇒日本臨床救急医学会の提言を実現できる連携体制づくり

介護職員への研修（取組み②）

柏市介護サービス事業者協議会主催にて、「導入編」として研修会を開催

- 日時：10月6日（金）午後6時30分～8時15分 柏地域医療連携センターにて開催
- 内容：「穏やかな看取りのために～ケアの道しるべと私たちの心得～」
- 講師：川村 幸子 看護師（のぞみの花クリニック看護師長・緩和ケア認定看護師）
- 内容：看取り期の身体的・精神的変化，急変時の対応，医療職につなげるタイミング等

＜研修の成果と今後の対策＞

- 研修の目的とした看取りに対する不安の軽減については，94%が「できた」と回答
⇒ 今までの看取りへの振り返り，死へのとらえ方，これからの自分の役割やケアについて考える貴重な機会となっている。
- 看取りに関する研修受講歴がない，ストレス・不安の軽減のためにも知識が必要との声
⇒ 看取り期の身体的・精神的な変化，対応方法について学ぶ場を作る必要がある
- 看取りを実施する上で重要なこととして，「利用者・家族に看取りについての周知と意思確認の必要性」，「医師との連携」，「介護職員の理解と協力」があげられた。



施設での看取り件数は増加傾向，現場最前線の介護専門職が，安心してその人らしさを支えるケアを行えるための体制整備と環境整備が求められている。

研修アンケートから得られた声（一部抜粋）

【ヘルパー】

- 医療的知識を知ることができ、落ち着いて対応できることがわかった。ヘルパーとして、利用者やご家族が安心して過ごせるように支えていけたらと思う。
- ターミナル期に入られた利用者の状態を思い出した時、あの時の行動や言葉の意味がわかった。知識の有無で不安が変わることを感じた。
- 私にはどのようなサポートができるのかよくわからなかったが、研修を受講して不安が減った。

【施設職員】

- 死へのプロセスを知ることによって、今まで急変だと思っていたことが自然なことだと聞いたことで、少し死に対する（看取り）ケアへの不安が軽減した。
- 利用者に安心していただけるように、大切な時間をスタッフも一緒に過ごし、慣れた声・慣れた顔でケアをさせてもらえたらと思う。
- 看取りの認識が変わった。「生活の延長」「Q O D」のこと等、新たな知識を得ることができた。